

転作目標面積七ヘクタール 実施計画者は早目に提出を

水田総合利用対策の推進につきましては、日頃格別の御協力を賜り深く感謝申し上げます。米の需給事情に対処するため昭和五十三年度を最終年次に第二次の米の生産調整が実施され、二年目を迎えたところです。本村への転作目標面積は昨年より一ha減の七haと定められました。(昨年の実施面積が七、三四ha)この点お含みのうえ本対策の実施にあたり特段のご協力をお願いいたします。



＝検察審査会の活用を＝ 泣き寝入りはしないで!!

検察審査会とは、国民の代表として衆議院議員の選挙権を有する者の中から「くじ」で選ばれた十一人の検察審査員で構成され、審査の申立てを受けると事件の真相を調査し、犯人が起訴されるべきものと判断されたときは、検事正にその旨を勧告する国の機関です。犯人を処罰するには、裁判所の裁判によらなければなりません。裁判所に、犯人の処罰を求めるのは検察官の仕事です。

月潟音頭歌詞決まる 六月中に発表会

これ不起訴といいますが。しかし、検察官は、すべての犯人を起訴するわけではなく、検察官の判断で起訴しないものもあります。これを不起訴といいます。検察審査会とは、この検察官の不起訴と判断した事件について、犯罪の被害者などから納得できないとして審査の申立てを受けたときなど、独自の立場で調査し、その不起訴処分が相当であるかどうかを審査し、その結果、不起訴処分が相当でないという結論に達したときは、その旨の議決書を作成して



月潟音頭の歌詞募集には多数の応募をいただき有難うございました。審査の結果残念ながら入選作なし、佳作8人と決まりました。専門家に依頼し次のように歌詞を作り直しました。引続き作曲、踊の振付けをして6月中旬に発表する予定です。

- (一)ハア 越後月潟名高いものは 月潟音頭
- (二)ハア 越後月潟名高いものは 雲か霞か 咲く梨の花 サテ 中之口川 水面に映える 村のむすめ 薄化粧 ソレ 村のむすめ ツンツンつきがた シャンツンつきがた シャンとシャンとひとおどり (以下はやし略)
- (三)ハア 黄金波うつ浦原平野 ことしや豊作 笑顔の村に 月も弥彦の 峰に照る 月も弥彦の 峰に照る つくる数では 全国一で 斬れのよさでも 日本一 斬れのよさでも 日本一
- (四)ハア 越後月潟人情のさとよ 月も弥彦の 峰に照る 月も弥彦の 峰に照る つくる数では 全国一で 斬れのよさでも 日本一 斬れのよさでも 日本一
- (五)ハア 越後月潟人情のさとよ 月も弥彦の 峰に照る 月も弥彦の 峰に照る つくる数では 全国一で 斬れのよさでも 日本一 斬れのよさでも 日本一
- (六)ハア 明日の月潟住みよい村へ 月も弥彦の 峰に照る 月も弥彦の 峰に照る つくる数では 全国一で 斬れのよさでも 日本一 斬れのよさでも 日本一

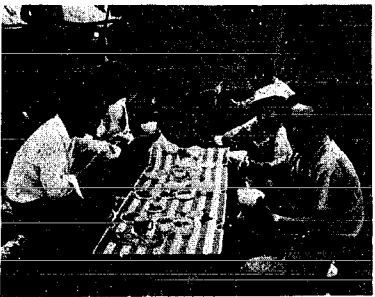
国民年金コーナー

みなさんの納めた国民年金の保険料は、将来、みなさんが年金をうけとるときにの財源(年金積立金)として、大蔵省の資金運用部にいったん預けられます。そこで、この年金積立金は政府の財政投融資計画の資金として運用されています。しかし、年金積立金はみなさんの年金を支払うためのものですから、郵便貯金や税収入などのはかの国の資金とは性格が異なるものです。ですから、とくに年金積立金の使用道には、国民生活の安定、福祉の向上に役立つような事業にと注文がつけられています。また、毎年の年金積立金のうち

「ソロモン諸島戦没者遺骨収集派遣団」に参加して

木滑 小林 寅雄

このたびの政府主催、ソロモン諸島遺骨収集は、去年八月十七日に東京の羽田を出発してから、九月十四日東京帰着までの二十九日間、厚生省職員五名、日本遺族会二十五名、戦友団体五名、五名、日本遺骨収集団五名の計六十名の人員で挙行されました。



川畔で昼食を 憩いのひととき (右前列が筆者、隣りが石塚さん)

遺骨収集に関する基本方針は、ソロモン諸島中、ガタルカナル島、ニュージョージア島、及びフロリダ島の戦没者遺骨を、今後、大規模な収集団を派遣する必要がある程度まで精査収集して内地に奉還するとともに、これら三島において、それぞれ現地追悼の行事をとり行なうものでした。

川畔の適当な砂利原でベースキャンプを設け、これを基点にして移動すること二度、三度、胸までつかって川を渡り、夜にはポーターの原人とキャンプの火を囲み、片言の英語と手振り話をしました。

このたびの集骨総数は、一三三九体でした。激戦の地域や海を見下す景勝の地でもある高台に、野戦方式に従って薪木を組み、遺骨をあげて火を放ち焼骨を終わりました。翌日、白袋に納めて追悼式をすませ、宿舎のホテルで帰国準備のときは、ひとつの使命を無事に終えた喜びでいっぱいでした。

木滑の小林寅雄さんと石塚徳夫さんは、昨年政府が主催した「ソロモン諸島遺骨収集団」として参加されました。この度、その貴重な体験を村民のみならずにも紹介するため、小林さんから寄稿して頂きました。

遺骨収集に関する基本方針は、ソロモン諸島中、ガタルカナル島、ニュージョージア島、及びフロリダ島の戦没者遺骨を、今後、大規模な収集団を派遣する必要がある程度まで精査収集して内地に奉還するとともに、これら三島において、それぞれ現地追悼の行事をとり行なうものでした。



川畔の適当な砂利原でベースキャンプを設け、これを基点にして移動すること二度、三度、胸までつかって川を渡り、夜にはポーターの原人とキャンプの火を囲み、片言の英語と手振り話をしました。

このたびの集骨総数は、一三三九体でした。激戦の地域や海を見下す景勝の地でもある高台に、野戦方式に従って薪木を組み、遺骨をあげて火を放ち焼骨を終わりました。翌日、白袋に納めて追悼式をすませ、宿舎のホテルで帰国準備のときは、ひとつの使命を無事に終えた喜びでいっぱいでした。

野戦方式の新木上の遺骨